105

変わる日本の「暮らし」と「まち」

多世代が健康に楽しく暮らせる新たなニュータウンへの取り組み

愛知県春日井市 高蔵寺ニュータウン再生への取り組み（2014年●平成26年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe

illustration：Shigeyuki Sakata

心地よい春の陽気に恵まれた3月27日。愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンにある自然豊かな高森山公園で、ウォーキングイベント「高森山でツツジを見よう会」が開かれた。イベントには100人以上が参加。新型コロナウイルス感染症対策のため少人数のグループに分かれながら、標高206メートルの高森山をガイドさんの案内で散策。みずみずしい新緑や淡いピンク色のコバノミツバツツジ、可憐なスミレなど、里山の春を満喫した。

ニュータウンに50年近く住むという二人組の女性は「長くここに住んでいるのに、この山に登ったのは初めて。こんないいところが近所にあるなんて、知らなかった」と驚いた様子。近隣に住む男性は「毎朝、山をウォーキングして公園でラジオ体操をするのが日課。近くにこんないい場所があるのはうれしいね」と笑顔で話してくれた。

このイベントは、地元のまちづくり活動を行うNPO法人高蔵寺どんぐりsとUR都市機構中部支社の連携によって催されたもの。ウォーキングガイドも務めた高蔵寺どんぐりsの堀内泰理事長は「高森山は約50年前に山火事でハゲ山になりましたが、地元住民がどんぐりの苗等を植えて復活させました。ところがその後放置され、常緑樹の茂る暗い森になってしまったのですが、我々有志が市と連携しながら、大人も子どもも自然と健康、憩いを感じられる里山にしようと、散策路の整備や下草刈りなどの整備管理を始めたんです。今回のイベントは、高森山を身近に感じ、健康促進やスポーツの場としてもっと利用してもらいたい、と開催しました」と語る。

高森山頂上付近でガイド役の堀内理事長（左から3番目）からの解説を聞く参加者たち。

（PR）

団地活性化への多様な試み

名古屋駅からJR中央本線快速に乗って、最寄りの高蔵寺駅まで約25分。名古屋市の北東、春日井市のゆるやかな丘陵地に広がる高蔵寺ニュータウン。1961年（昭和36）に計画作りが本格化し、1968年に入居がスタート。総面積約702ヘクタール、計画人口8万人以上という壮大な規模で、URの前身である日本住宅公団が開発を手がけ、日本三大ニュータウンのひとつに数えられる。

それから50年余り。当時入居した住民が徐々に高齢化し、子ども世代が巣立つなど、このまちにも少子高齢化の波が押し寄せている。

現在もニュータウン内で多くの賃貸住宅を管理し、市と協力してニュータウンの再生を手がけているURは、活性化のためにさまざまな試みを始めている。UR中部支社市街地整備第2課長の松原弘明が語る。

「かつてはベッドタウンとして名古屋に通う方が多かったのですが、現在はリタイアして地域で活動する方が増えています。地域に溶け込んでいる女性が多い一方、今まで会社勤めをしていた男性は地域コミュニティーに馴染みの少ない方も多いのです。URでは、そうした方々も家の外に出て生き生きと元気に暮らし、活動できるコミュニティー作りにも力を入れています。今回のイベントもその一環で、どんぐりsさんの活動を知り、高森山が住民の方々の健康とスポーツの拠点となることを願って、お手伝いさせていただきました」

今後も、散策路沿いの樹木に設置する樹名板作りのワークショップを開くなど、さまざまな活動を予定しているという。

また、コミュニティーの場作りとして、団地商店街などの空き店舗や集会所を改修し、コミュニティースペースとして自治会などに提供。幅広い世代が気軽に立ち寄れるコーヒーサロンなどに利用できる取り組みも始めた。

団地マネージャーの糸川朝彦は「団地活性化のために、2014年から中部大学の学生さんに団地に住んでもらい、地域のイベントに参加してもらう取り組みを始めています。2015年からはニュータウン内の5つの団地で地域医療福祉拠点化に着手し、お住まいの方々に快適に暮らし続けていただけるよう、バリアフリー化や浴室ヒーターをつけた健康寿命サポート住宅を供給したり、中層5階建て団地にエレベーターを設置するほか、生活支援アドバイザーを配置して高齢者からの相談などに応じています」と話す。

誰もが健康に暮らせるまちに

URのこうした動きは、春日井市の施策とも深く結びついている。市では2016年に「ほっとできるふるさとでありながら、新たな価値を提供し続ける〝まち〟であり続けること」を目指し、「高蔵寺リ・ニュータウン計画」を策定。次の10年を見据えた昨年度の改定では、ニュータウン内の高森台団地の再生と連携したスマートウェルネスなまちづくりを先行プロジェクトとして位置づけた。

それに対応し、URも高森山整備などさまざまな事業を通して、市との連携を強めている。

「団地や周辺地域の価値や利便性向上のため、高森台団地の一部住棟を解体して、スマートウェルネスに役立つ健康施設や商業施設、憩いのための施設などを誘致する計画を進めています。第一弾として、健康施設を含むホームセンターを誘致予定です」と、UR事業推進課の大井涼介が説明する。

「高森台の団地再生をきっかけに、新しい商業施設や住民の方々に入ってきていただきたい。そして、ゆくゆくは高蔵寺ニュータウン全体が、多世代の方々が交流し、健康で楽しく暮らすことのできるまちになってほしい。そのために、今後も行政や地域の方々と連携を強めていきたいですね」と松原。

半世紀の時を経て、壮大なニュータウン再生への歩みが始まった。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社

本シリーズの感想をお寄せ下さい。宛先は〒162-8711 東京都新宿区矢来町71
株式会社新潮社広告部　変わる日本の「暮らし」と「まち」係まで。
バックナンバーは、UR都市機構ホームページ（www.ur-net.go.jp/aboutus/recommend/change.html）に掲載しています。